



Title	不定代名詞束縛ととりたて詞「も」の分析
Author(s)	片岡, 恋惟; 大野, 公裕
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 30, 61-72
Issue Date	2020-04-15
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77573
Type	bulletin (article)
File Information	06_kataoka_ohno.pdf



[Instructions for use](#)

不定代名詞束縛と とりたて詞「も」の分析

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士課程

片岡 恋惟

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 特任教授

大野 公裕

片岡
恋惟

KATAOKA Rei
OHNO Kimihiro

Indeterminate Pronoun Binding and the Analysis of Additive Particle *Mo*

KATAOKA Rei
OHNO Kimihiro

abstract

Within the framework of generative grammar, this paper attempts to argue that the additive particle *mo* 'also' in Japanese is a head that takes a maximal projection as its complement but is not available as a label. The previous analyses of *mo* as an adjunct to a head (cf. Kishimoto 2001, Hiraiwa 2005) cannot explain the fact that subject indeterminate pronouns in Spec-v*P position can be licensed by *mo*. This fact can only be explained by the proposed analysis in which *mo* takes a maximal projection as its domain. We will also argue that *mo* is a head based on the head-complement order in Japanese and propose that it cannot provide a label just like a conjunction in Chomsky's (2013) analysis. Finally, we will show that as a consequence of the proposed analysis the Raising-to-Object construction in Japanese can receive a simple account in terms of standard CP structure, instead of Hiraiwa's (2005) layered CP structure.

1 はじめに

(1) や (2) における不定代名詞（「誰」、「何」、「どれ」など）は、Kuroda (1965) が最初に観察しているように、とりたて詞「も」と結びつくとき否定極性表現（negative polarity item, NPI）として機能する。

- (1) 誰も本を買わなかった。
- (2) 太郎は何も買わなかった。

不定代名詞は (3) のように、必ずしも「も」と隣接する必要はない¹。しかし、不定代名詞はNPIとして認可されるためには、(4) のような「不定代名詞認可条件」を満たさなければならない（cf. Sakai 1998, Hiraiwa 2005, Yamashita 2009）。これまで日本語のとりたて詞「も」は、一般に主要部の右側に付加する要素であると考えられてきた（cf. Kishimoto 2001, Hiraiwa 2005）²。この仮定のもとで、(3) の文法性は、「も」が機能範疇 v^* に付加しており、不定代名詞「何を」は内側の括弧で示した「も」の作用域内で認可されると説明される。

- (3) 太郎が_i [v^* P [v P 何を買ひ] v^* -も] しなかった（こと）。
- (4) 不定代名詞認可条件
不定代名詞がNPIとして機能するためには、とりたて詞「も」の作用域（=c統御領域）内になければならない。

それに対し (5a)、(5b) が非文法的であるのは、「も」はそれぞれ決定詞（determiner）と補文標識（complementizer）に付加しており、不定代名詞「誰が」はいずれの場合においても「も」の作用域外にあるためであると説明されてきた。

- (5) a. *誰が_i [DP [NP 花子の本] D-も] 読まなかった（こと）。（Hiraiwa 2005）
- b. *誰が_i [CP [TP 太郎が_jその本を買った] と-も] 思わなかった（こと）。

しかし、本稿では、日本語のとりたて詞「も」は主要部に対する付加詞であるという従来の分析とは異なり、「も」は最大投射を補部にとる主要部であることを論じる。本稿の構成は以下の通りである。まず2節において、とりたて詞「も」は (i) 付加詞ではなく、主要部であり、(ii) 最大投射を補部にとり、(iii) それ自体はラベルにならない（投射しない）、というそれぞれの主張を支持する証拠を提示する。次に3節では、まず不定代名詞が再構築によって認可され得ることを論じる。そして、Miyagawa (2001, 2005) のスク

- ▶1 (1) における「誰も」と (2) における「何も」はそれぞれ daRE-MO、naNI-MO という音調パターンを持つ（大文字はピッチアクセントを表す）。(3) 以降のとりたて詞「も」と隣接していない不定代名詞についても naNI-O のように同様の音調パターンで発音される（cf. Hiraiwa 2005）。
- ▶2 その他の分析として、Aoyagi (1999) はとりたて詞「も」を最大投射を含む、あらゆるレベルの投射に付加する要素として分析している。

ランブリングに対する分析を採用することで、本稿の「も」の分析が主語の不定代名詞の認可に関して正しい予測を示すことを示す。さらに4節では、本分析の帰結として、日本語の目的語繰り上げ構文に対して、Hiraiwa (2005)における階層的CP構造ではなく、標準的CP構造によるより簡潔な説明が可能となることを示す。最後に5節は、本稿における主な主張のまとめである。

2 本論の主張— とりたて詞「も」の3つの特性

本稿では従来の分析とは異なり、とりたて詞「も」に対し以下の3点を主張する。

- (6) とりたて詞「も」
 - a. 主要部である
 - b. ラベルにならない
 - c. 最大投射を補部にとる

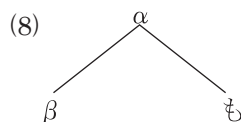
まず (6a) の「も」が付加詞ではなく、主要部であるという主張の根拠としては、日本語では付加詞は一般に左側に付加するのに対し、主要部は右側に現れるという事実が挙げられる。すると、「も」は右側に現れるため主要部と考えるのが自然である³。

次に (6b) の「も」がラベルにならないという主張は、Chomsky (2013)における等位接続詞に対する分析に基づいている。例えば、(7) の等位構造において等位接続されたXとYがNPである場合、 α はConjPではなくNPとして機能し、主語や目的語の位置に現れる。

- (7) [α X [β Conj Y]]

Chomskyはこの事実に基づき、等位接続詞をラベルにならない主要部として分析している⁴。

日本語のとりたて詞「も」についても、同様の分析が可能であると考えられる。例えば、(8) の構造において β がNPである場合は、(9a) のように「NP + も」である α もまたNPとして機能し、動詞の目的語となる。また、 β がCPである場合は、(9b) のように「CP + も」である α もまたCPとして機能し、動詞の補文となる。



▶3 本稿では、「主要部」という用語は補部をとるX⁰レベルの範疇という意味で用いる。

▶4 Conjとそれが主要部となっている β はいずれもラベルにならないため、 α はXのラベル(通常Yと同じ)を受け取る。

- (9) a. 太郎は [NP [NP リンゴ] -も] 買わなかった。
 b. 太郎は [CP [CP 花子を馬鹿だと] -も] 思わなかった。

もし (8) において α が「も」のラベルを受け取る、つまり α が AddP (Additive Particle Phrase、とりたて詞句) になるとすると、上記の (9) において動詞は NP や CP ではなく AddP を選択することになり、選択制限の違反が生じてしまう。

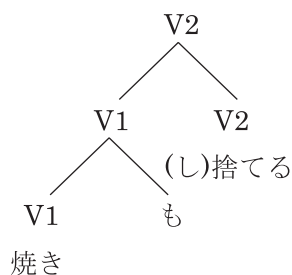
以上のことから、日本語のとりたて詞「も」は等位接続詞と同様に、主要部でありながらラベルにはならない範疇であると考えられる。以下では、(8) の構造において α は β のラベルを受け取ると仮定する。

次に (6c) の「も」が最大投射を補部にとるという仮定に関しては、語彙的複合動詞と統語的複合動詞におけるとりたて詞「も」の振る舞いの違いがその根拠となる。例えば、(10a) のような語彙的複合動詞「焼き捨てる」では V1「焼く」と V2「捨てる」の間に「も」を介在させることができないが、(10b) のような統語的複合動詞「焼き始める」ではそれが可能である⁵。

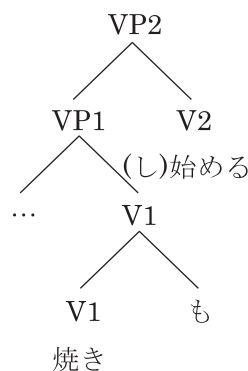
- (10) a. *太郎は書類を焼きもし捨てた。(語彙的複合動詞)
 b. 太郎は書類を焼きもし始めた。(統語的複合動詞)

もし従来の分析のように、とりたて詞「も」が主要部に対する付加詞であるならば、(10a) と (10b) に対する構造はそれぞれ (11a)、(11b) となり、いずれの場合においても「も」は V1「焼く」に付加した構造となる。この分析では、(10a) も文法的であると予測され、(10) における文法性の対比を説明することができない。

(11) a. 語彙的複合動詞

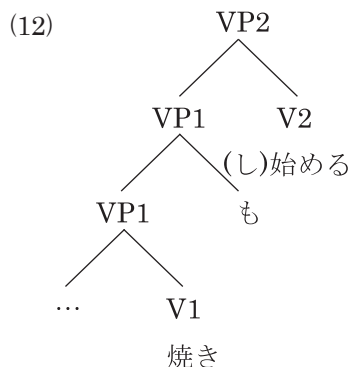


b. 統語的複合動詞



それに対し、「も」は最大投射を補部にとる主要部であるという本分析では上記の対比を説明することができる。すなわち、(10b) の構造は「も」が最大投射 VP1 を補部にとる (12) の構造となるが、(10a) の構造は (11a) のように「も」が最大投射ではない V1 を補部にとるため不適格となる。

▶5 (10a, b) において V2 の「捨てる」、「始める」は動詞との結合を必要とする接辞であり、ここでは「する」挿入によって「し」が挿入されると仮定する。



したがって、とりたて詞「も」は主要部に対する付加詞ではなく、最大投射を補部にとる主要部であると結論づけられる。

3 主語の不定代名詞の認可

3.1 再構築による認可

本節では、不定代名詞は再構築によって認可され得ることを論じる。

従来の分析 (cf. Kishimoto 2001, Hiraiwa 2005) では、以下の (13) のように目的語である不定代名詞がスクランプリングによって前置された例文は非文法的と判断され、それゆえ不定代名詞は再構築によって認可されることができないと主張されてきた。

(13) *何を_i太郎が [t_i 買い] もしなかった (こと)。

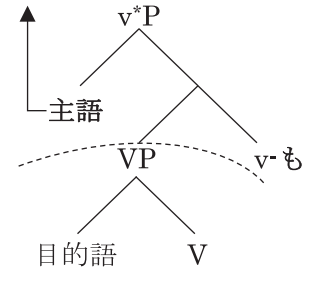
- (14) a. *誰が_i [花子の本] も読まなかった (こと)。(Hiraiwa 2005)
 b. *誰が_i [太郎がその本を買った] とも思わなかった (こと)。

しかし、(13) に対する容認度は、不定代名詞が派生のいかなる段階においても「も」の作用域外にあり完全に非文法的である (5) ((14) として再掲) と比べ、それほど低くないように思われる。実際に、Sakai (1998) は (13) と同様の例文を容認可能であると判断し、不定代名詞は再構築によって認可され得ると論じている⁶。また、ミニマリストプログラムでは、移動は内的併合として捉えられ、元位置には移動した要素のコピーが残ると仮定されている。したがって、再構築は原理的に常に可能であり、不定代名詞が再構築によって認可され得るという主張は理論的にも妥当である。以下では、(13) のように不定代名詞が移動操作によって「も」の作用域から出る場合、不定代名詞は再構築によって認可され得ると考える。

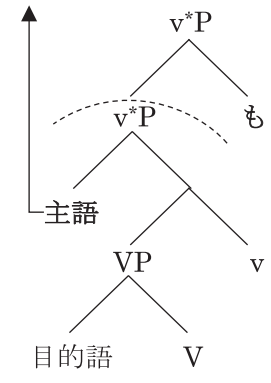
不定代名詞の再構築による認可は、Saito (1989: 192) が指摘した (15) の例文において見られるwh句の認可と同様であると考えられる。(15) ではwh句「どの本を」が疑問助詞「か」の作用域内からスクランプリングによ

▶6 Sakai (1998) は、以下の (ia) における目的語wh句が前置された (ib) は文法的であると判断し、前置されたwh句は再構築によって認可されると論じている。
 (i) a. その先生が [s どの学生を褒めよう] ともしない。
 b. どの学生をその先生が [s t_i 褒めよう] ともしない。

(19) a. 従来の分析



b. 本分析



したがって、(17) と (18) における主語の不定代名詞の認可に関する対比は、とりたて詞「も」が付加詞ではなく、最大投射を補部にとるとい本稿の分析を支持する。

次に、Miyagawa (2001, 2005) のスクランプリングに対する分析を採用すると、とりたて詞「も」が最大投射を補部にとるとい本稿の主張がさらに支持されることを示す。

Yamashita (2009) は、(17a) における目的語がスクランプリングによって文頭へ移動した (20) のような例文は完全に容認可能であると判断している⁸。

(20) 太郎の論文を_i [誰が_{t_i} 読み] もしなかった (こと)。

さらにYamashitaは、Kuroda (1965: 93) における関係節内の主語が不定代名詞である以下の例も完全に容認可能であると判断している。

(21) [これまで誰が考えもしなかった] アイディア

このように主語が不定代名詞の場合でも、完全に容認可能である例文が存在する。以下では、(20) の例文についてMiyagawa (2001, 2005) のスクランプリングに対する分析を採用し、本稿の分析がその容認可能性を説明できることを示す。

Miyagawa (2001, 2005) は、(22) と (23) の例を挙げ、それらは共に「全員」が否定辞 (Neg) よりも広い作用域をとる全部否定の読みはあるが、その逆であるNegが「全員」よりも広い作用域をとる部分否定の読みに関しては違いがあることを指摘している⁹。

(22) 全員がそのテストを受けなかった (こと)。

(23) そのテストを_i 全員が_{t_i} 受けなかった (こと)。

Miyagawaの判断によると、(22) では「全員」は部分否定の解釈を受けることはできないが、(22) における目的語が文頭へ前置した (23) では「全員」は部分否定の解釈も可能である。主語の「全員」が部分否定の解釈を受ける

▶8 Yamashitaは (17a) と (20) における容認度の違いを韻律的側面から説明している。

▶9 Miyagawa (2001, 2005) では、(22)、(23) における全部否定の解釈は、いわゆる「グループ読み」によって得られると仮定している。本稿でもそれに従い、ここでは部分否定の解釈の有無のみを問題とする。

ためには、(24) において「全員」がNegの作用域内、すなわちv*P指定部位置になければならない。

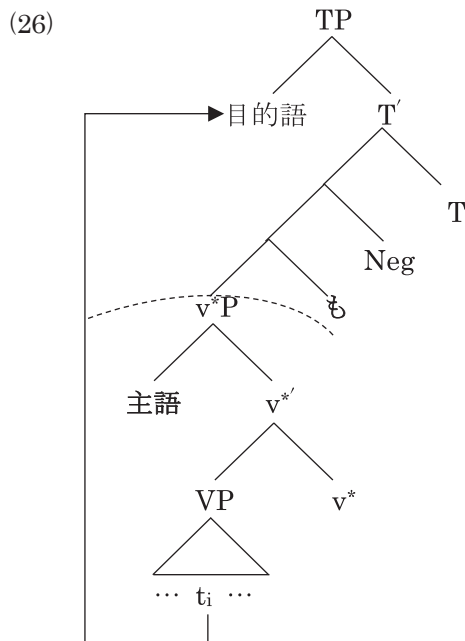
(24) [TP (主語) [Neg [v*P (主語) … v*] Neg] T]

そこでMiyagawaは、(22) では主語の「全員」はTP指定部へ移動し、Negの作用域外に出るため部分否定の読みがないのに対し、(23) では目的語の「そのテスト」がTP指定部位置を占め、それにより主語の「全員」はNegの作用域内であるv*P指定部位置に留まるため部分否定の読みが可能であると主張した。

ところが、多くの話者の判断では (22) においても部分否定の解釈が可能である。ただしKoizumi (2017: 566) によると、一般に (22) は (23) と比べ部分否定の解釈が得にくいようである。そこで本稿では、(22) と (23) における部分否定の解釈の得やすさにおける違いは、(22) では「全員」がTP指定部位置にあるため再構築による認可が必要であるのに対し、(23) では「全員」がv*P指定部位置に留まっているため再構築の必要がないという違いから生じているのではないかと考える。もしそうだとすると、(22) と (23) における部分否定の解釈の可能性に関する違いは、Miyagawaのスクランプリングに対する分析を支持することになる。

このMiyagawaの分析を (20) (= (25) として再掲) の不定代名詞構文に採用すると、目的語は (26) のようにスクランプリングによりTP指定部位置を占め、主語である不定代名詞は基底のv*P指定部位置に留まることができる。もしとりたて詞「も」が最大投射v*Pを補部にとるとすると、不定代名詞は派生のいかなる段階においても「も」の作用域内にあるため、(25) が完全に容認可能であることが説明される¹⁰。

(25) 太郎の論文を_i [誰が_i t_i 読み] もしなかった (こと)。



▶10 Kuroda (1965) が挙げた (21) の完全に容認可能である例においても、主語がTP指定部位置ではなく、v*P指定部位置に留まっていることが示唆される。このことは関係節の内部構造を明らかにする上で貴重なヒントになると思われるが、この問題については今後の課題としたい。

しかし、もし従来の分析のように「も」が主要部に付加する要素であるならば、不定代名詞は派生のいかなる段階においても「も」の作用域外にあり、(25)は(18)と同様に完全に非文法的であると判断されるはずである。

以上のように、(25)が完全に容認可能であることもまた、とりたて詞「も」が主要部に対する付加詞ではなく、最大投射を補部にとる主要部であるという本分析が妥当であることを示している。

4 目的語繰り上げ構文

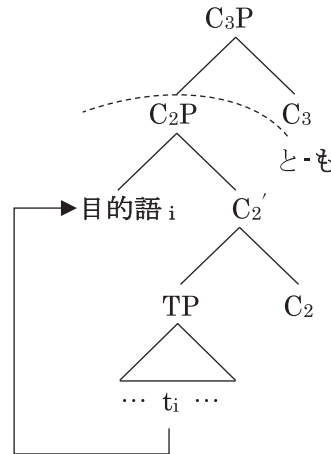
最後に、とりたて詞「も」は最大投射を補部にとる主要部であるという本分析を仮定することで、日本語の目的語繰り上げ構文に対し、Hiraiwa (2005)における階層的CP構造ではなく、標準的CP構造によるより簡潔な説明が可能になることを論じる。

Hiraiwa (2005)は、(27)の目的語繰り上げ構文を以下のように分析している。

(27) 太郎は誰を馬鹿だとも思わなかった。

(27)において、目的語である不定代名詞は主節の機能範疇 v^* から格付与されるために、埋め込み節のCPフェーズの先端 (edge) へ移動しなければならない。「も」が補文標識Cに付加しているという仮定のもとでは、もし不定代名詞がCP指定部位置へ移動すると「も」の作用域から出るため、(27)が完全に文法的であることを説明することができない。そこでHiraiwa(2005)は、Rizzi (1997)における階層的CP構造理論に基づき、(27)に対し(28)のようなCPが2層から成る構造を仮定している。

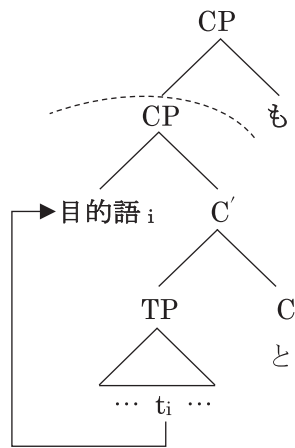
(28) Hiraiwa (2005)における目的語繰り上げ構文に対する構造



Hiraiwaは(27)が文法的であるのは、(28)においてとりたて詞「も」は上位の C_3 に付加し、不定代名詞はそれよりも下位の C_2P 指定部位置へ移動することにより「も」によって認可されるからであると説明している。ただしこの説明においては、(i) とりたて詞「も」が C_2 ではなく、 C_3 に付加しなければならない、(ii) 上位の v^* から C_2P 指定部位置にある目的語に格を付与するために、 C_3P がフェーズであってはならない、という少なくとも2つの仮定が必要である。しかし、Hiraiwa (2005) ではこれらの仮定に対して独立の根拠は提示されていない。

これに対し、「も」は最大投射を補部にとる主要部であるという本分析では、以下のようなCPが1層から成る標準的CP構造を仮定することで、(27)の文法性を捉えることができる。

(29) 本分析における目的語繰り上げ構文に対する構造



(29) では「も」はCPを補部にとっており、目的語はCP指定部位置を占めている。したがって、目的語の不定代名詞は派生のいかなる段階においても「も」の作用域内にあるため、(27)が完全に文法的であることを説明することができる。

このように、「も」が最大投射を補部にとるといふ本分析を仮定すれば、日本語の目的語繰り上げ構文に対して、(28)のような階層的CP構造ではなく、(29)のようなCPが1層から成る標準的CP構造によるより簡潔な説明が可能となる。

5 おわりに

本稿では、日本語のとりたて詞「も」が、従来の分析 (cf. Kishimoto 2001, Hiraiwa 2005) のようにある主要部に対する付加詞ではなく、最大投射を補部にとるラベルにならない主要部であると主張した。

具体的には、まず日本語では一般に付加詞は左側に現れるのに対し、主要部は右側に現れるという事実から、「も」は主要部であると考えるのは自然である。

次に、「も」がある要素と結びつくことによってできる構造は、「も」と結びつく要素のラベルを受け取るという経験的証拠から、「も」はラベルにならない範疇であると考えられる。

さらに、主語の不定代名詞がNPIとして認可されるという議論に基づき、「も」は主要部に対する付加詞ではなく、最大投射を補部にとるという本稿の主張が妥当であることを示した。

最後に、本稿の主張の帰結として、日本語の目的語繰り上げ構文に対して、Hiraiwa (2005) における階層的CP構造よりも簡潔な標準的CP構造による説明が可能であることを指摘した。

謝辞

本稿は、2018年11月に行われた日本言語学会第157回大会（於：京都大学）での口頭発表「不定代名詞束縛における再構築効果ととりたて詞『も』の分析」に改訂を加えたものです。会場では多くの方々から有益なご質問やコメントを頂戴しました。また、本稿の執筆にあたっては査読者の方々から大変貴重なご指摘を頂きました。記して、深く感謝申し上げます。

参考文献

- Aoyagi, Hiroshi (1999) On Association of Quantifier-like Particles with Focus in Japanese. In Masatake Muraki and Enoch Iwamoto (eds.) *Linguistics: In Search of the Human Mind – A Festschrift for Kazuko Inoue*. pp.24-56. Tokyo: Kaitakusha.
- Chomsky, Noam (2013) Problems of Projection. *Lingua* 130. pp.33-49.
- Fukui, Naoki and Margaret Speas (1986) Specifiers and Projection. In Naoki Fukui et al (eds.). pp.128-72. MITWPL 8. Cambridge, MA: MIT, MITWPL.
- Hiraiwa, Ken (2005) Indeterminate-Agreement: Some Consequences for the Case System. In Ken Hiraiwa and Joey Sabbagh (eds.) *Minimalist Approaches to Clause Structure*. pp.93-128. MITWPL 50. Cambridge, MA: MIT, MITWPL.
- Kishimoto, Hideki (2001) Binding of Indeterminate Pronouns and Clause Structure in Japanese. *Linguistic Inquiry* 32.4. pp.597-633.
- Koizumi, Masatoshi (2017) Subject. In Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa and Hisashi Noda (eds.) *Handbook of Japanese Syntax*. pp.553-579. Boston/Berlin: Walter de Gruyter.
- Kuroda, S.-Y (1965) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*. PhD dissertation, MIT.
- Miyagawa, Shigeru (2001) EPP, Scrambling, and Wh-in-situ. In Micheal Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A life in Language*. pp.293-338. MIT Press.
- Miyagawa, Shigeru (2005) On the EPP. In Martha McGinnis and Norvin Richards (eds.) *Perspectives on Phrases*. pp.201-236. MITWPL 49. Cambridge, MA: MIT, MITWPL.
- Rizzi, Luigi (1997) The Fine Structure of the Left Periphery. In Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*. pp.281-337. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Sakai, Hiromu (1998) Raising Asymmetry and Improper Movement. In Noriko Akatsuka et al (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 7. pp.481-497. Stanford, Calif.: CSLI.

Saito, Mamoru (1989) Scrambling as Semantically Vacuous A' -movement. In Mark R. Baltin and Anthony S. Kroch (eds.) *Alternative Conceptions of Phrase Structure*. Chicago: University of Chicago Press.

Yamashita, Hideaki (2009) "Split" Indeterminate NPI Pronouns in Japanese and the Syntax-Prosody Interface. In Shoichi Iwasaki, Hajime Hoji, Patricia M. Clancy, and Sung-Ock Sohn (eds.) *Japanese/Korean Linguistics 17*. pp.343-357. Stanford, Calif.: CSLI

大野 公裕
片岡 恋惟

KATAOKA Rei
OHNO Kimihiro